北海道医歌人会詠草

地震

旭川　稲積　文子

地震にてオール電化に住みたれば　玄関は開かず鉄格子の窓
朝起きて米のままなる炊飯器　幾ら覗けど御飯に非ず
食べ物は何とかなるよ戦中派　これくらいで驚く必要なし
のけぞって村上水軍の打つ太鼓　気が付けば吾ものけぞっており
忘れたきことを謝る人居りて　溝はいよいよ深まりてゆく

歌の力

江別　三宅　浩次

復興の合唱ひびく被災地の歌の力に勇気づけられ
美しき青きドナウの演奏に感激したのは少年の時
ウィンフィルを生で聴きたいと思えどもその機を逸し未だ果たせず
敗戦のうなだれた首を持ち上げた笠置シヅ子と高峰秀子
運命の扉を開くベートーベン変人奇人と言われしままに

シコタンタンポポ

札幌　浜島　泉

この丘にシコタンタンポポともに見しボランティア仲間　逝きて久しく
ナシの実を回して皮を剥きて見す　妙技と言ひて喝采を受く
出来秋を嗜む夕餉　故郷の友送りける松茸の飯
なり年と言ひ妹が送り来し柿に蘇へる　朝冷え木もぎ
十月の始めといふに　白き虫目の前に飛ぶ間もなく雪か

廃墟行

釧路　児玉　昌彦

万を越す人々集いし炭鉱町いま跡もなく木枯らしぞ吹く
石炭を運び出したるトロッコの軌道架台は草木に埋もれて
煙突と竈の残る炭住跡　小さなオマルが語る人の気
鉄筋のコンクリートも屋上に木々の繁れる時間の歩み
発電で町を守りし大煙突　墓標のごとく原野に立てり

冬

北広島　古屋雅三知

黄昏の身を震わする帰宅時の　銀杏並木に氷雨降る降る
街路樹の紅(あか)も黄色も色褪せて　雪降る時節(とき)と早なりにけり
三羽四羽(さんわしわ)　川面を泳ぐ白鳥の声高らかに響く朝かな
羊諦の頂ほんのり白くして　七十回目の冬は来たれり
風寒きタイヤ交換せし午後に重き空より初雪の降る

冬支度

函館　水関　清

惜し気なく秋の装ひ脱ぎすてて　銀杏並木は　冬に備える
乱舞する雪虫　微かな風を生み　森の木々らは美白にはげむ
雪深し　古書街に買ふツルゲネフ　長き夜渡る方舟のごと
札幌の丘珠行きの航空機　三日月軸に　街旋回す
茶碗蒸し底に　大きな栗ひとつ　置きて帰省の子らもてなさむ